

を取り扱った本書は、従来の実践と思想を中心とする研究に対して、斬新な視点を提示した。しかし、現段階では「孝」という徳目に限られたものである。それを「道徳史」全体に広げる際に、表象文化論をどのように展開していけるのか。そもそも、「孝」とは、狭い意味での「孝行」の徳目であるほか、より広義的に捉えることができる道徳倫理の重要なキーワードでもある。「孝」の意味を広げることによって、「孝子」から出発した「表象文化論の道徳史」の成果も、思想史研究全般に及ぼすことが可能になるのではなからうか。これは本書から読者に投げられた大きな課題であろう。

(立命館大学専門研究員)

藍弘岳著

『漢文圏における荻生徂徠』

——医学・兵学・儒学——

(東京大学出版会・二〇一七年)

澤井 啓一

荻生徂徠研究は、明治期に「功利主義」との類似性が注目されて以来、ながらくその著作を哲学ないし政治思想の考察対象とする形で展開されてきた。もちろん「日本思想」を対象とした政治思想史研究が日本で確立されるには丸山眞男を待たなければならぬが、そこで日本における〈近代化〉の重要な指標として徂徠が取りあげられていたことは、近代の日本人が徂徠に向けた〈まなざし〉がどのような性格であったかをよく物語っている。また文学研究の領域でも、漢詩文制作方法としての「古文辞」は、明治期から取りあげられてきたのだが、一九七〇年代になって吉川幸次郎が徂徠の語学説と文学説、すなわち「古文辞」に関する議論を儒学説(哲学)に先立つ学問方法論として位置づけたことによって新たな展開が始まった。吉川の議論は、すでに村岡典嗣が本居宣長について発見した構図ではあったが、徂徠の「古文辞」論を文学研究という狭い枠内にとどめず、思想史研究との連動性を強く求めた点で重要であった。宣長が徂徠の方法論を「領有」していた以上、吉川の議論

は当然なされるべきものであったにしても、近代日本の中国学に絶大な影響を誇った「京大シナ学」の碩学が指摘したことの影響は大きかった。

徂徠の伝記研究の嚆矢ともいえる岩橋遵成『徂徠研究』が早くから指摘していたように、徂徠の業績は「経学」「経世論」や「漢詩文」とどまらず、諸子研究や兵学・医学など多岐にわたっていた。これらに関してもそれぞれ個別の研究は多くあるが、相互の関係性となると、扱うべき領域が広すぎるためか、全体をきちんと整理したものは皆無と言つてよい。個々の領域のなかで徂徠の位置が説明されればよい方で、多くは丸山や吉川の議論には収まりきれない徂徠の多面性を紹介するにとどまっていた。これまでのところ、徂徠の活動の全体像がいかなるものであったかは十分に説明されてきたわけではないのである。伝記的な（ナラティヴ）のなかで徂徠のさまざまな業績を紹介するのはなく、徂徠論としてその全体像を語るためには、徂徠の業績を羅列することや、日本における前後の動向のなかに徂徠を位置づけることだけでは達成できるはずもなく、東アジアの同時代の思想動向、さらには文化的現象すべてにわたる動向を視野に入れた（ナラティヴ）が要請されている。

本書がこうした要請に十分に応えているとまで言うつもりはない。むしろ本書の特色は、上述したことが現在の徂徠研究におけるもっとも緊要な課題であることを強く意識したうえで、それを解決すべく、さまざまな試みを一冊の著作として編

み込んだことにある。「あとがき」に記されているデータを見ると、本書に収録された各章は、二〇〇六年から〇八年にかけてのもの、二〇一四年から一五年にかけてのもの、二〇一八年にかけられる。なかでも後半の論文群には、著者が日本ばかりでなく東アジアの同時代的動向との関係性を強く意識しだしたことが窺える。この問題意識は「序論」と「結論」においてより鮮明に示されているが、そのことに触れる前に、本書の内容について簡単なコメントとともに順次紹介してゆくことにする。

本書は三部構成で、第一部は「荻生徂徠の医学、兵学、文学（詩文論）」と題され、徂徠の活動の初期に展開された儒学以外の議論が扱われている。ここから徂徠論を始めたことに著者の工夫が認められるのだが、本書全体の副題に医学・兵学が使用されていることからすると、医学・兵学を扱った議論が第一章だけであり、なおかつ徂徠の初期思想として扱われていることには疑問が残る。この第一部では「訳学」や文学理論としての「古文辞」なども取りあげられているので、著者の意図が、徂徠の問題関心とその当初においても多様な広がりをもっていたことを示そうとした点にあったと考えておきたい。

第一章に戻ると、あまり扱われることのない『徂徠先生医言』や『孫子国字解』を取りあげた点、また医学・兵学に通底する認識として「活物」的な自然観が存在すると指摘した点も評価に値する。そうではあるが、最晩年に『鈐録』が書かれ、徂徠が明代經由の新しい軍事技術に関心を抱いていたことを考

えると、初期の兵学に関する問題意識が徂徠のなかでいかに維持または発展されていたのかという課題は残されている。また家系上の関係から徂徠が「朱医方」系の人々と深く交流していたこと以外にも、新興の「古医方」系に属する芳村恂益の『二火弁妄』に序文を寄せていることなどを勘案すると、医学についても検討すべき課題が残されているよう。それゆえ徂徠の思想的変遷とそこにおける医学・兵学の関わりについて、その後の展望に関しても著者なりの見通しが示されるべきだったと思われる。

第二章から第四章までは文学（詩文論）が扱われている。第二章は明代の古文辞派に関する議論で、第四章では徂徠以前にさかのぼって日本における明代古文辞派受容の歴史が語られている。その間に徂徠の「訳学」を論じた第三章が挟まれていて、ここでは『訓訳示蒙』総論と『訳文筌蹄』題言を取りあげられて、徂徠の「訳学」が「音読」と「看書」という二つの方法論によって構成されていたことが指摘される。この第三章と、明代古文辞派、とりわけ李攀龍と王世貞の詩文に関する「理論」を扱った第二章とが加えられたことによって、徂徠が語る「古文辞」論だけを扱ってきた従来の研究に較べると、時間的・空間的な幅が与えられた分だけ、徂徠の議論に関する分析もより緻密に展開できるようになったと言える。この点が本書の最大の成果で、学ぶべきところは非常に多い。今後の徂徠研究では、本書の議論を踏まえることが必須とされるにちがいない。

文学（詩文論）に関しては著者による多くの有益な知見が示されているが、それについて詳しく論じるゆとりがないので、ここでは第二章についてのみ取りあげる。第二章では、明代古文辞派の人々が「古文辞」に独自の「法」を見いだそうとしたことが指摘されている。それ以前の宋代では詩人たちの「意」、すなわち「情感」は、文学として表出される以前の「人性」の問題として扱われてきたのだが、明代古文辞派の人々はそれが文学的表現という形式の問題として扱われるべきだと主張したのである。文体論と修辭論を一体化した「文学理論」の成立ということのだが、さらに著者は当時盛んであった「評点学」に着目し、それが明代古文辞派における「法」と深く関わっていることを指摘する。本章は明代古文辞派に関する議論ではあるが、吉川幸次郎の「徂徠学案」に依拠してきたこれまでの徂徠研究の水準を一步進めたものとして高く評価できる。ただ「文学理論」として明代古文辞派を扱う以上は仕方がないのかもしれないが、王世貞の議論に寄りかかりすぎている点が気になる。徂徠が安藤東野と自身の文章を李攀龍をモデルとする「李子麟体」と呼びつつ、自分たちの「古文辞」的な表現方法が確立されたことを高らかに宣言していたことに鑑みれば、徂徠における「古文辞」なるものがいかなる文体なのかについてさらに検証する必要があるだろう。もちろんこの点は著者はかりでなく、今後の徂徠研究全体の課題でもある。

第二部は「漢文圏における荻生徂徠の儒学」と題され、徂徠

の代表的な作品を対象に経学的方法論としての「古文辞学」を緻密に分析し、その議論が清朝と朝鮮朝の人々に与えた影響を述べた第五章（方法としての古文辞学」と、徂徠における「聖人の道」の分析と中国・日本における他の政治改革論と比較した第六章（歴史認識と政治思想）」とが収録されている。

第五章について言えば、評者もまたかなり以前に「〔方法〕としての古文辞学」という同名の論文を発表したことがあるが、それは従来論議されてきたような文学的な方法論としてではなく、経学とも通底した「方法」として「古文辞学」なるものが存在し、かつそれは言語論を媒介とした認識論的な手続きに基づいたものであったことを「仮説的」に提示したものであった。本書の場合は、すでに「古文辞学」が経学的な方法論であることを前提に、明代の文学と経学との接点にある「評点学」を取りあげ、さらには清朝や朝鮮朝における「考証学」的な学問との比較を行うことよって、徂徠における特質を浮かびあがらせようとする。本章は「古文辞学」の内容の説明としては、現在もつとも充実していると言えるのだが、著者が重視している明末の「経書評点学」との関係性についてはまだ十分に説明されているわけではない。さらには、このことに言及することによつて文学的な修辞法だけでなく、言語的手続きに基づくこととされてきたこれまでの「古文辞学」への方法的説明との関係についてもより突つ込んだ議論が必要であつたように思われる。

第六章は、徂徠の歴史認識や政治思想を扱った点で、これま

での思想史研究における徂徠論にもつとも接近している。ただし本章の組み立てはかなり複雑で、「方法としての古文辞学」が秦漢以前の「古文辞」を読解する方法論にとどまらず、古代中国の歴史的变化を理解し、それに基づく制度改革を構想することに「応用」されたという前提のもとに、徂徠の「聖人の道」が説明され、さらに古代中国から日本へとという歴史に対する問題意識の転換が新井白石との対比によつて描かれ、最後に同じく宋明理学からの脱却を試みた明末清初の顧炎武と日本の山鹿素行との比較から「儒教政治思想史」における徂徠の立場を明らかにするという展開となっている。このように多くの問題を組み入れたために、著者によつて示された多くの優れた指摘がすんなりと読者に了解されないという問題も残る。さらに言えば、第五章における「古文辞学」の定義と同様に第六章においても、もつとも肝腎の近世東アジアにおける「儒教政治思想史」なるものが不明瞭なままに終わっている点は、本書の細部にわたる指摘が重要であるだけに惜しまれる。

第三部は「漢文圏における徂徠学派」と題され、「徂徠学派文士」と著者が呼ぶ徂徠の門人やその後継者たちと朝鮮通信使との交流や、かれらが清朝の学術・文学にいかなる評価を下していたのかという問題が取りあげられている。第七章は、朝鮮通信使の来日によつて生じた交流が丁寧論じられている。「交流」といっても、近年の文学研究が描くような「和氣譚々」としたのではなく、通信使側が日本の漢詩文における技術向

上に関心を深めるようになったのに対して、「徂徠学派文士」は自分たちの学術や文学に対する「過度」な自己評価から、朝鮮を見下すような「優越意識」を生じてさせていたと指摘している点は、著者の鋭い問題意識をよく示している。

これは第八章においても同様で、第三章で扱われた「訳学（唐話学）」が再び取りあげられ、徂徠を始めとする「徂徠学派文士」が、「唐話」学習から言語に関する認識を深める一方で、長崎に在住する「唐通事」や、かれらと交流のあった「来日華人」を見下すような意識を持っていたことが指摘される。さらに清朝を満州族が支配する「胡土」とし、かえって日本

を「華」とする優越意識も生まれ、幕末の「国体論」へと展開してゆくという「見通し」が示されている。著者のこの「見通し」は徳川中期以降から近代までを射程に入れた日本思想史を構想するうえできわめて重要な示唆となろう。

序論と結論は、最後の第八章に呼応しており、「古文辞学」が確立されるにつれて、「徂徠学派文士」が、当時において日本こそがもっとも「古の中華」に近いという優越意識を強めていったこと、それに加えて日本が「武国」であるという意識も加味されていたことが指摘されている。ただし「武国」意識に關しては、第六章の一節で扱われているだけで、議論が十分に尽くされているとはいえない。徳川日本の思想を検証する際に「文」だけでなく「武」にも注意を払うべきという著者の指摘はまさにその通りだが、日本の儒学者のなかでも突出して

「文」を意識した「古文辞学派」の人々が、「武」においても他の儒学者よりも強く反応したという問題は、制度改革という政治論にとどまらず、より深められた地平、すなわち「古文辞学」の方法論のなかで探究される必要がある。これは著者が本書を出発点としてさらに研究を深めるうえでのテーマであろうが、同時に今後の日本思想史研究や東アジア思想史研究においても重要なテーマとなることだろう。

もう一つ指摘したいことは「漢文圏」の問題である。著者は序論で、「近代」からの視点や欧米からの命名である「東アジア」を避けて、「漢文圏」という概念を採用したと述べる。同時に「宋学的な思维様式、文学スタイル」が主流だったのが「漢文圏」なのだから、「東アジア近世」を「宋学の近世」と捉え直してもよいとする。「漢文圏」と「宋学」との関係性については、思想領域だけでなく、文学や医学・兵学といった領域を加えてさらに精緻化されるべきだろうが、これもまた一つのフィクショナルな時空間に過ぎないから、そのこと自体にはとくに異議はない。ただし「漢文圏」という設定も注意深く扱わないと、著者が避けようとした近代主義的な発想、「宋学的な諸様式」を正統とし、それ以外を異端とするような二元論的な図式に陥りかねない。この点に一抹の危惧を覚えた。

十五世紀以降の東アジアでは、「宋学的な諸様式」を正統とする認識もたしかに存在していたが、そこで再生産されたものはオリジナルな様式からすでに逸脱していたし、またそれへの

対抗として登場した陽明学・朝鮮実学・古文辞学は異端ではなく、むしろ正統意識の産物であった。このことに関連して注目されるのが、本書では比較的言及が少ない朝鮮王朝の動向である。朝鮮王朝こそっとも「宋学的な諸様式」が主流を占めていた地域であり、「古文辞派」——韓国では「擬古文派」ないし「秦漢擬古派」と呼ぶ——も存在したが、「派」と呼ぶのが躊躇されるほどに相互に関わりの少ない人々が異なる時期に関心を抱いたものに過ぎなかった。しかしそれは、陽明学や清朝の学術への態度とも共通するが、朝鮮王朝の〈思想史〉における「地下水脈」と呼ぶべきものだと言える。そこから朝鮮王朝において「地下水脈」だったものが、なぜ徳川日本では表舞台に浮上し、一時的とはいえ世間を席巻するような動向を示したのかという疑問が生じてくる。この問題式を解くには「武」という関係項だけでは十分ではなく、それとは別に「俗」（『大衆化』）という項目を立てる必要がある。もちろんこれは評者の問題関心でしかないのだが、ついでに指摘しておく。

（恵泉女学園大学名誉教授）

西村玲著

『近世仏教論』

（法蔵館・二〇一八年）

藤井 淳

本書は二〇一六年に亡くなられた故・西村玲氏が生前に発表した論文を末木文美士・曾根原理・前川健一の三氏を中心となって編集・校正したもので、西村玲氏の遺稿集である。評者は西村氏と研究分野は離れているが、氏と交友があり、日本思想史学会からの依頼で書評を担当することとなった。本書の性格上、通常の書評と異なる形となることを諒解せられたい。

最初に著者である西村玲氏の略歴を紹介する。氏は一九七二年東京に生まれ、東北大学文学部を卒業し、同大学博士課程を修了、博士（文学）を取得された。その後、日本学術振興会特別研究員（SPDC）等を経、二〇〇八年に博士論文を元にした『近世仏教思想の独創——僧侶普寂の思想と実践』（トランスビュー、以下『普寂』と略する）を刊行、二〇〇九年に「普寂を中心とする日本近世仏教思想の研究」により、第六回日本学術振興会賞を受賞し、さらに受賞者の中で特に優れた業績に与えられる日本学士院学術奨励賞を翌年に受賞した。その後も本書に取められる諸論文を発表されていたが、闘病の末、二〇一六年